臺、御座平座敷席、有御脇息圓座、止銀器、用黑漆合子、高盛御さば器等缶器如恒、

〔嬉遊笑覽二下器用〕里ばなれたる處などには、漆もぬらぬ合子を用ひたる故に、質朴に堅固なるものを、白木合子といふ是なり、夢窻國師本來意をよめる、山賤の白木の合子そのまゝに漆つけねばはげ色もなし、

〔古今著聞集十六興言利口〕同院北御室隨身中臣近武がはかまぎを執し覺し召けるに、何事のはれにてか有けん、上童を召供せらるゝ事有けるに、近武を召て、汝がはかまぎは殊に執し覺しめさる、此童に其定に著せてとらすべしと仰られければ、近武承て則かの童の出立の所へ行にけり、先酒をこひ出していひけるは、大がうしにて五ど召べし、其後たか枕をして去ばしねべきよしをいひければ、童も堪能者にて有けるにや、かひ〳〵敷いふがごとくにのみてねにけり、

〔山槐記〕仁安二年二月十一日庚辰、略中關白被行朱器饗之時、箸、七并小合子、兩三、諸卿懷中之、故實云々、

〔庭訓往來〕引入合子

〔庭訓往來諸抄大成扶翼上〕引入合子

貞丈云、引入の二字ひきれと讀べし、職人盡歌合に、ひきれうりあり、歌にもひきれと讀たり、其繪にはうるしぬりの椀を賣る體を畫たり、椀はめしわん、汁わん、ふた等を重ね入るやうに作たる故に引入と云なり、合子はわんの事なり、みとふたと合ふことゆへ合子と云なり、本式の食器はかはらけにてふたなし、

〔新撰類聚往來中〕曳入合子

〔七十一番歌合上〕二十番　右　ろくろし

嬉しくもひきれにしたるつきの木の月のかけぬをこよひみる哉